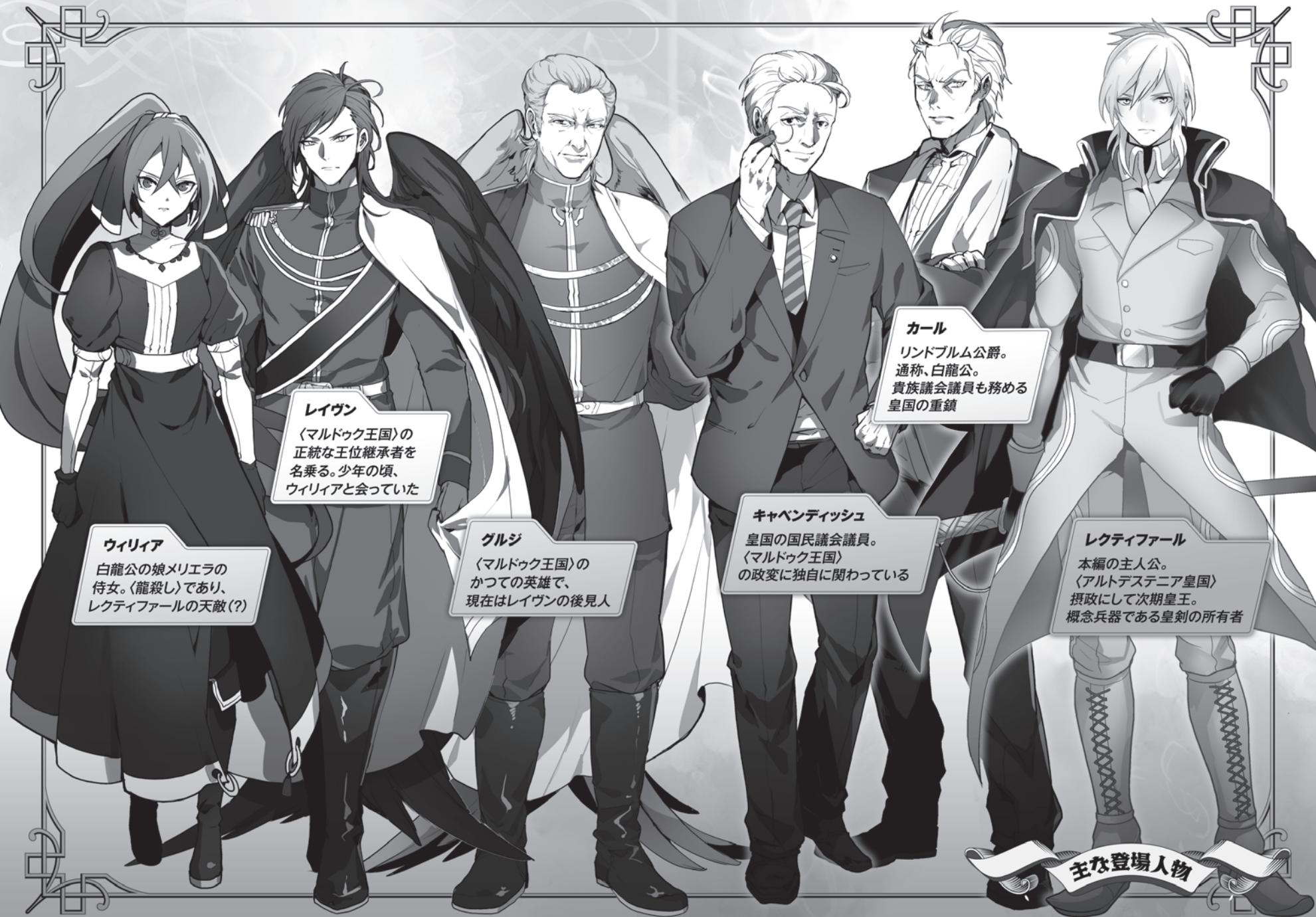


白の皇国物語
14



ウィリア

白龍公の娘メリエラの
侍女。〈龍殺し〉であり、
レクティファールの天敵(?)

レイヴン

〈マルドゥック王国〉の
正統な王位継承者を
名乗る。少年の頃、
ウィリアと会っていた

グルジ

〈マルドゥック王国〉の
かつての英雄で、
現在はレイヴンの後見人

キャベンディッシュ

皇国の国民議会議員。
〈マルドゥック王国〉
の政変に独自に関わっている

カール

リンドブルム公爵。
通称、白龍公。
貴族議会議員も務める
皇国の重鎮

レクティファール

本編の主人公。
〈アルトデステニア皇国〉
摂政にして次期皇王。
概念兵器である皇剣の所有者

主な登場人物

新生アルマダ帝国

マルドゥク王国

アキタニア王国

自由騎士国ガイエンルツヴァイテ

グラッツラー伯国

アルトデステニア皇国

都市同盟

アルマダ大陸



目次

第一章 新星 11

第二章 魔王子 93

第三章 マルドウク動乱 145

第四章 それでも世界はいつものように 251

多くの苦難を乗り越え、彼らは父祖の地へ帰ってきた。

それが望まれた帰還ではないことに気付きながらも。

世界は変わってしまった。

周囲に彼らが記録していた星座はすでになく、見慣れた蒼い星はまったく別の形に変化していた。

四つの強固な次元障壁に阻まれ、多くの犠牲を払いながら辿り着いた故郷は、かつての故郷ではなくなっていた。さらには、星を守るようにして幾体もの守護者が配置されており、地上に降りることは困難だった。

守護者との戦いに敗れた彼らは、宇宙の彼方に新天地を求めて旅立った同胞たちの元へ帰るしかなかった。

だが、彼らは自分たちの故郷に自分たちの記憶を残したいと願った。そして、比較的損傷が軽微だった十六隻の艦に自らの記録を残し、惑星へと送り込んだ。

半数以上が、守護者によって撃沈されるか、推進力を失って衛星へと落ちた。

そして片手で教えられるほどになった彼らの艦は、やはり大半が惑星へと落ちる途中で砕けた。地上まで辿り着いたのは、僅か二隻のみだった。

第一章 新星

公都へリンドヴルム〉の街並みは、想像していたよりも遥かに整っていた。

首都であるヘイクシードンに較べれば、いささか古風でこじんまりとした印象を感じさせるものの、傍らにある名勝水精湖との組み合わせは、この地が皇国有数の観光地であることを納得させた。

「あれが白龍宮か」

街の片隅にある湖畔の公園。その長椅子に座っている有翼人の少年は、街からすこし離れた場所にある白亜の城を見詰めて呟いた。

四つの公都のうち、構造的に見てもっとも軍事色が薄いのがヘリンドヴルムだ。都市としての規模も決して大きくなく、人口のみで考えれば皇国の上位十都市に辛うじて数えられるに過ぎない。

だが、ここを治める人物が皇国でもっとも権威ある貴族であることを、少年は知っていた。白龍公カール・フォン・リンドヴルム。貴族の中の貴族と呼ばれる龍の貴顕。

（少なくとも、母上を王都から追い遣った者たちとは較べものにならないだろうな）

顔を顰め、じつと城を見据える。

リンドヴルム公爵領は決して、裕福な土地とは言えない。面積も、少なくとも他の三人の公爵の所領に較べれば小さなものだ。大身で知られる幾人かの侯爵と較べても、見劣りするかもしれない。

しかし俯瞰して見れば、この地が皇都に向かうための街道の要衝にあり、周囲を山々に囲まれている天然の要塞であることに気付く。

リンドヴルム公爵家は、率先して皇都の盾になる場所を所領として求め、それを認められた。より正確に言うならば、縄張りであった場所を皇王家に譲り、生まれ故郷の片隅を所領としたのだ。

その事実ひとつをとっても、リンドヴルム公爵家が貴族としての気質を備えていることが分かる。

また、他の大都市と違って巨大な城壁を築かなかつたのは、皇王家に対する謀叛の意思を否定するためだとされている。とはいえそこには、そんなものがなくてもこの地形自体が要害であるため、いわずに軍都化する必要はなく、なにより民に負担を掛けるような真似はしないという意図もあった。「あやつは、まだ戻らんか」

師であると同時に唯一の家臣である男が、公都にある商会のひとつに入ってからだいぶ時間が経っている。

この都市の治安は、少年をひとり公園で待たせていてもまったく問題が生じない程度には良かった

し、本人もそうした心配はしていない。ただ、胸中に言いようのない寂寥感が溢れてくるのだ。

「何を莫迦な」

あの男は自分を裏切らない。裏切るはずがない。

もしも裏切るならば、もっと前にそうしていたはずだ。自分というお荷物を抱えるには、あの男は優秀すぎる。たとえ祖国に戻ることができないとしても、いくらでも仕官先を見付けることができるはずだった。

「くそっ」

彼は小さく毒づき、木製の長椅子を殴る。

——彼に何者かが近付いてきたのは、そのときだった。

「もし、その人」

彼は身体を緊張させ、飛び立つ準備をしながら振り返った。

果たして、そこにいたのは少年と同年代の少女がひとり。

蒼い髪を背中まで伸ばした彼女は、鳶色の瞳で少年を見詰めた。

「体調が悪いのですか？ 顔色があまり良くないように見えますが……」

少女の言葉遣いは、大人のそれと何ら違いがなかった。ところどころ舌つ足らずな発音が見られるが、子どもっぽさは感じられない。

そのため、少年は警戒を緩めることができなかった。

（誰だ？ 地元の子どもというにはいささか……）

自分を追ってきた誰かかと思ったが、言葉の訛りは皇国のそれである。まったく別の言語を第二言語として用いる〈イズモ神州連合〉が隣にあるせいか、幾つか特徴的な訛りがあるのだ。

もともと、この世界に独自の言語を持つている国は少ない。少年は少女の言葉を申し分なく理解していた。

「大丈夫だ。何も問題はない」

彼は突き放すような冷たい声音で答えた。これで少女が怯えて立ち去るならば儲けもの、と思っていた。

しかし、彼の予想に反し、少女は全く怯えた様子を見せずに、かえって近付いてきた。

それには少年の方が驚いてしまった。

「でも、あなたはこの街の方ではありませんよね？ もしかしたら、旅の疲れが溜まっているのかもしれない」

少女は少年の前に立つと、そつと手を伸ばして彼の額に触れた。

「やめ……っ」

彼女の手を振り払おうと手を上げたが、しかし少年はそれを実行することができなかった。

自分の額に触れる少女の手のひらが、母と同じ温もりを持っていたからだ。

武門の娘なのか、臣下の老将と同じように硬くなった手のひら。だがそこから感じる温かさは、彼が遥か昔に忘れてしまったものだった。

「熱はないようですが、旅の疲れは本人が気付かないうちに溜まっていくものと聞きます。今日は宿に戻って休まれた方がよいではありませんか？」

少女は彼の内心など気にすることなく、ただ体調だけを心配している。

彼女生来の氣質がそうさせるのか、初対面の少年に対しても全く遠慮がなかった。

（くそ、何だというのだ）

少年は、自分の瞳をじつとまっすぐ見詰めてくる少女に戸惑った。

母が死んで以来、こうして少年と目を合わせる者などいなかったのだ。一瞬視線を交わしたとしても、すぐにその目に宿る狂気に触れて顔を逸らした。

もしも少年が少女の出自を知っていたら、自分の弱さに気付いたかも知れない。

彼が抱く狂おしいまでの復讐心も、千年万年を費やして形成された力ある種族の意識には到底及ばない。そうした者たちの意識に日常的に触れている彼女だからこそ、たとえ幼子であっても少年の眼差しに耐えられたのだろう。

しかし、彼は何も知らなかった。



故に、ただ顔を伏せて言った。

「大丈夫と言いたいところだが、お前の顔を立てておく」

「そうしてください」

少女はそう言って立ち上がった。

「お、おい」

その仕草に慌てた少年が、少女の手を取る。突然手を握られた少女は驚いた様子だったが、彼は一気にまくし立てた。

「俺はまだしばらくこの街にいる。いつもこの公園にいる」

それは年相応の少年らしい、何よりも自らの矜持が先に立つ物言いだった。

会いたい。

たった一言が、素直に口から出せない。

「だから……」

そこまで口にして、少年は自分の言動に強い羞恥を抱いたらしい。

彼は握っていた手を離し、ぶいと顔を逸らした。

「何でもない」

ちょうどそのとき、どこか遠くから人の声が聞こえてきた。

甲高い声は幼い子どもものだろう。少年は声が聞こえてきた方向に目を向ける。すると、少女も同じようにそちらを向いていることに気付いた。

「どうやら、わたしを呼んでいるようです」

「そうか……」

友人が少女を探しているのだろう。少年はそう当たりを付けた。

「さっさと行ってやったらどうだ？」

彼は少女に言い放ち、足を組んで湖に向き直る。

少女は一瞬躊躇ったようだったが、一礼して声の主がいる方向に向けて歩き出した。

そして、しばらく進んで立ち止まり、言った。

「それでは、また」

「——！」

驚き、振り向いた少年は、背筋を伸ばして歩く少女の後ろ姿しか見ることができなかった。

しかしその姿は彼の心に焼き付き、自らの生涯を大きく変化させることになる。

それは同時に、ふたつの国の運命をも左右することになるのだった——



皇国議会議事堂は、皇国暦一八九九年に七代目の建物が完成した。レクティファールが摂政として始めて議会観覧を行うことになったのは、この建物である。

皇城の添え物扱いされることの多い建物だが、初等学校の研修旅行などでは見学順路に含まれることが多く、国民の認知度は高い。

議事堂にはふたつの議場があり、ひとつは貴族議会議場、もうひとつは国民議会議場と呼ばれている。これらはいくまで俗称であり、公的にはどちらの議会がどちらの議場を使うべしという規定はない。ただ、皇城に近い方の議場を貴族議会が使用し、皇都に近い方を国民議会が使用している。

その国民議会議場で、定例本会議と呼ばれる会議が行われていた。

「軍務院と内務院の人材交流にしましては、内務院としては有事の際に軍の指揮下に入る衛視隊への実戦に即した訓練。軍務院としては市井を知っている主計士官の育成など、互いに多くの利点がございます……」

「どうせいつも同じ奴が行ったり来たりしてるだけだろお!!」

「交流した結果の報告書が上がってないぞお!!」

「将来の幹部候補だけ優遇してるんじゃないのか!!」

扇状に広がる議場の一角を占める少数派閥からの質問に答えた軍務院副総裁に野次が飛ぶ。

官庁間の人材交流には毎年それなりの予算が投じられているが、それが形骸化しているのではないかという指摘は以前からあった。

確かに、そうした部分もある。

いつも同じ人員が交流しているのは、何も知らない者を送り込まれても教育に時間を取られてしまから。

提出される報告書が少ないのは、出向先の官庁で知り得た情報を元の職場で明かせない場合が多いから。

そして、将来が有望視されている官僚が優先的に交流人員に選ばれるのは、単純に優秀な人材にこそ他の官庁の実情を知って欲しいからだ。

それぞれ理由があり、何度も説明されているのだが、議員たちは納得しない。いや、あえて納得していない。

議員の存在意義のひとつは、皇王から権限を貸し与えられている行政府の運営が、その権限に相応しい形で行われているかを監視することにある。

各官庁を秘密裏に調査するために、皇王直轄の国事監察院という組織も存在するが、誰の目にも明らかでない形で官庁の存在意義を糺すこともまた必要なのだ。

少なくとも議員たちはそのように自分たちの行動を正当化していたし、政府としてもそうした姿勢

を批判することはない。

ただ国民議会では、議員としての評価が後の人生をも大きく左右してしまうため、自然と議員たちの追及は苛烈なものとなるのだ。そして、追及の対象となった様々な人々は憔悴するが、怒りを堪える。ちなみに、今壇上に立っている軍務院副総裁は、議会担当副総裁という立場でもあった。仕事は、皇国議会の小会議や定例会議で軍務院としての意見を述べ、諸処との交渉を行うことだ。

軍務院の中でも激務として知られており、健康を損なうことの多い立場だとも言われている。これまで健康そのもので精気に満ちていた官僚が、僅か一ヶ月で生ける屍と化することも珍しくない。

だがごく稀に、この立場になつてから輝きを見せる者もいる。

現在の軍務院副総裁は、そういった人物だった。彼は勢い込んで責め立ててくる議員に対し、軍の現役時代に培った低く響く声で答える。

「我々は、誓つて、必要な、報告は、す、べ、て、摂政殿下に献じております」

「だからどうしたと——」

さらに野次を飛ばそうとした議員が、隣に座っている同僚から体当たりを食らう。何をするのかと文句を言おうとするも、周囲に座る、これまで一緒に声を上げていた議員たちが自分を睨み付けていることを察し、口を噤んだ。

そこで彼は、自分がすっかり皇王家を軽んじる発言をしようとしていたことに気付く。摂政が見て

いるからと張り切っていたが、張り切り過ぎて摂政を貶める言葉を発してしまうところだった。

顔を真っ青にした彼が自らの手で自らの口を塞ぐのを見て、同僚たちは緊張を解いた。彼ら議員の名譽を保証しているのは皇王家である。その皇王家を正当な理由なく貶めてしまえば、それは自分たちの名譽を否定することにも繋がる。

「――あー、質問はないようなので、この件に関する軍務院からの報告と、それに対する質疑応答を終了します」

議長が傍聴席の一角にちらちらと視線を向け、議題の終了を告げる。

それに対し、誰も文句を付ける者はいなかった。

「あの莫迦者め」

レクティファールは、隣から聞こえてきた低く震える声でそちらを見遣り、声の主である宰相ハイドルの額にはつきりと青筋が浮かんでいるのを確認した。

三院――外務院・内務院・軍務院――を統括する立場の彼にとって、副総裁は当然部下になる。その部下が、摂政の名を用いて議員たちの質問を押し潰したことに、彼は深い怒りを抱いていた。

「まあ、いいじゃないか。私の名で収まる程度の疑問だったということだ」

「そうであつたとしても、殿下の權威を笠に着て己を押し通すことは、公僕たる三院幹部がするべき

ことではありませぬ」

レクティファールは、老人らしい節くれ立った手が青瑪瑙でできた杖の握りの上で震えているのを見て、この老人の死因は憤死になるかもしれないと思つた。

しかし、ハイドルは宰相位に就いてから体調が劇的に改善しており、健康診断でも軽く一〇歳は若い数値を叩き出している。実際、ここ最近毎日皇城正面城門から宰相府までを歩いて出仕し、昇降機も用いずに過ごしているという。

（食事もそこの若い官僚より摂っていると聞くし、やはり何か仕事をしていた方が人生に張りが出るのかもしれないな）

そうレクティファールは考えているが、本当のところハイドル自身にもよく分からない。

ただハイドルの細君は、夫が以前よりも生き生きとしていることを喜んでおり、夫を変えてくれたレクティファールに感謝していた。

「とにかく、あやつには一度言つて聞かせねばなりません」

「そうか、まあ、良きに計らえ」

「ははっ」

レクティファールは、ハイドルやそれ以外の誰であつても、その仕事に横から口を挟むようなことはしない。レクティファールは事業に対し、自らが最善と思う臣下を配置するのが仕事だ。

自分が最善と思うことと、臣下が最善と考えることは違う。別の意識を持っているのだから、辿り着く結論が異なるのは当たり前だ。

レクティファールがすべきは、そのふたつの最善の差異をどのような形で許容するか考えることで、差異を悪として是正することではない。もしもそれがどうしても悪だとするならば、それは結局レクティファール自身の責任なのだ。

「さて、貴族議会の方も見てみようか」

「は」

レクティファールが傍聴席から立ち上がると、議長が目敏く気付いて、議員たちに起立を促そうとする。しかし、レクティファールは手を挙げてそれを制し、ハイデルと護衛の衛兵を伴って議場をあとにした。

他人の仕事の邪魔をするのが摂政の趣味だと思われるのは、やや愉快だが外聞はよろしくない。彼は国民議会名物である取っ組み合いを始めた議員たちの怒声を聞きながら、分厚く巨大な議場の扉を潜った。

「ああ、お帰りになったようだ」

傍聴席に目を向けた隣の議員が、どこかほっとしたように呟いた。

国民議会議員キャベンディッシュは、そんな同輩の姿に苦笑いし、どこから自らの眉間目掛けて飛んできた鋼筆を避けた。

鋼筆はそのまま飛んでいつて背後の壁に当たり、文墨を撒き散らす。係員が慌てて掃除が始めるが、この調子ではまだまだ汚れるだろう。

「パートン卿は、殿下が苦手でいらつしやるか？」

キャベンディッシュは、分厚い下敷きを盾にしている同僚にそう訊ねる。

「まさか！ しかしこう、初等学校の時分の参観日を思い出しましてな。どうしても緊張してしまうのです」

「なるほど」

キャベンディッシュは何度も深く頷いた。

議員たち——否、皇国の民にとって、皇王や摂政は親のようなものだ。それは自分を庇護してくれると同時に、生殺与奪の全権を握っているという意味も含まれる。

子の将来をある程度決めてしまえる点では、まさに『親』と言える。

「おお、商会派の連中、あの野人まで持ち出しましたぞ」

そう言われ、乱闘の中心を見る。

そこには、巨大な腕を振るう巨人族の姿があった。国民議会の一派である商人たちの一派、その

中に属する坑夫から身を立てた鉱山商会の会頭だ。名をザルグという。

「議長が逃げ出しましたな」

「そのようで……」

いつの間にか、議長席に座っていた男の姿が消えている。確かに戦場は議長席に近い位置で、何が飛んでくるか分かったものではない。

議長席の背後には国旗と皇王家紋章旗が掲げられているから、そちらに向かって何かを投げつける者はいないだろうが、流れ弾が飛んでこないとも限らない。

実際に、議長にお茶入りの断熱瓶が直撃し、そのまま医務室に担ぎ込まれた事態もかつてあった。

おそらく今頃は、議長席の下から移動できる隠し通路で控え室に避難していることだろう。

「やはり、金が絡むとやる気が違うものですね」

キャベンディッシュが言うと、先ほどまで喋っていた議員とは逆隣にいた老年の女性が、静かに笑い声を上げた。

扇子を振るって飛んできた杯を撥ね飛ばし、ころころと笑っている。

「税の話題ですから、皆さん真剣になつてしまふものですよ」

新たな議題は、来年から施行する新しい税率だった。皇国ではほとんど毎年のように税率の再計算が行われ、対象になる品目も多い。

官僚出身で現在も各官庁と関係の深い官僚派と、商人出身の商会派による争いは枚挙に遑がないが、こと税に関することとなると加勢するのも仕方がない。

一方は如何にして多くの税を取るかを考え、もう一方は如何にしてそれを防ぐかを考えているのだ。激しい争いになるのも当然と言える。

「刀自は参戦なされないのです？」

キャベンディッシュは老女に訊ねた。

彼は老女が数世代前の装甲乙女騎士団の参謀だったことを知っていた。乱闘の現場を見詰める眼差しの鋭さを見れば、並大抵の使い手ではないことも分かる。

「いいえ。ある方と、二度と力を振るわないと約束しましたので」

「そうですか、それはもったいない」

老女の来歴は、議員たちの間ではそれなりに有名だった。乙女騎士だった頃、当時の皇王との間に子を儲け、しかし皇妃となることを拒んで退役したことも知られている。

当時の真相は分らないが、退役後に皇王府から援助を受けつつ女手ひとつで子どもを育て上げ、唯一の男だった人物の意志に添うべく人々を救う慈善団体を作り上げた。

その功績もあつて多くの人に慕われ、支援者からの熱意の籠もった説得もあり議員に立候補し、当選した。

「ああ、まだ机が壊れましたね」

老女が困ったように笑う。

議員たちが使う緩やかな曲線を描いた机は、精緻な彫刻が施された一枚板の天板と、やはり緻密な彫刻が施された縦板でできている。巨人族議員に放り投げられた巨漢の議員が落下して、その天板を打ち割り、木片を周囲に散乱させる。

だが、まだ乱闘は収まらず、それどころか新たな参加者が次々と現れる始末だ。

「まあ、今日はお隣から乱入もないようですし、そのうち収まるでしょう」

老女がそう言つて視線を向けた先には、貴族議会があるはずだった。

「貴公らは始原貴族の名をどう考えているのか！」

拡声器も使わずに議場に轟く雷声。

発生源は、扇型に配置された貴族議会議員席をおおよそ四つに分割したうちのひとつ、通称リンドヴルム翼の最上段近くであった。

声の主はリンドヴルム公爵、カール。自ら皇国に降り、議会に席はあつても姿を見せない大公を除けば、彼以上の貴族はここにはいない。

「いえ、始原の名は我々もこの上なく重く受け止めており、それ故に大身であるパールト伯爵を推

挙したわけでした……」

雷鳴の標的となつている演壇の上で、ひとりの壮年貴族——カント男爵が、額から大粒の汗を噴き出しながら答弁を行っていた。一応彼は、派閥的にはレヴィアタン公爵系に属しているが、そもそも貴族議会での派閥などあつてないようなものだ。

それでも一縷の望みを抱いて、演壇から見て右端——レヴィアタン翼最上段にいるレヴィアタン公爵マリアに縋るような視線を向ける。だが、ただにこやかな笑みを浮かべるだけのマリアから、救いの手が差し伸べられることはなかった。

「では、貴公は当家が本身故に初代陛下よりリンドヴルムの名を与えられたと申すか！」

「いえ！ いえ！ まさかそのようなことは……」

拡声器を用いるカント男爵と、地声で話すカール。しかし明らかにカールの声の方が大きく、聞いている人物の脳を揺らしている。

議場にいる議員たちは、摂政レクティファールが入室したことにも気付かないまま、その声に身を縮こまらせていた。

「あの、公？ 何か白龍の殿様の機嫌悪くありませんか？」

「んあ？」

隣に座る従弟に話しかけられたスヴァローグ公フレデリックは、持っていた雑誌と口を開いたままそちらに顔を向けた。

「いえ、今日のカール様は妙にピリピリしているなあ」と

議場の中で、カールの怒声にまったく応えていないのは、カール以外の三公爵と比較的長い議員経験を持つ一握りの貴族だけだ。彼らはエルフや天族、魔族などの力ある種族が大半である。ただ、それらの種族の中でも比較的若い者になると、その他大多数と同じように嵐が過ぎ去るのを待っている状態だった。

「そりゃヒトだもの、機嫌が悪い日ぐらいあるだろ」

フレデリックはそう答え、従弟の言葉を意に介した様子を見せない。

「そういう問題では……」

彼——ウォルド・ギア・カティーナは、スヴァローグの分家であるカティーナ伯爵家の当主であり、もちろん龍族だが、カールの豪声には身体がびくりと震えてしまう。隣にいるフレデリックが落ち着いているからこそ、辛うじて平静を保っているに過ぎない。

「んー、もしかしたら、これかもしれないな……」

フレデリックがそう言って手渡してきた雑誌を受け取り、はてこれは何であろうかと、中身を読む。「んなあつ!？」

思わず上げたウォルドの声に、周囲の視線が集中する。

慌てて愛想笑いを浮かべて誤魔化すも、彼の内心は大きく動揺していた。

「こ、ここ、公……! これは……」

「おう、艶小説ってやつだな。さすがの俺でも、議会で艶本を読む気にはなれなかったぜ」
けらけらと笑うフレデリックだが、ウォルドが求めていた答えはそれではない。

確かに、議会で艶本の類を読むことに對して言いたいことはあるが、元来フレデリックが議会で重要な役目を果たすことは稀である。

多くの場合は顔見せであり、何かするとしてもスヴァローグ系の議員たちが無茶をしたときに後始末をする程度だ。彼らは紅龍公の氣質が伝染したかのように勇猛果敢であり、議會を牽引することも多かった。だからこそ、紅龍公は常に彼らの抑制装置だったのだ。

もともと、今の議場でもっとも苛烈に進軍を続けているのは、スヴァローグ系議員ではなく白龍公カールであり、血気盛んな若い議員たちは揃って彼の姿に怯えている有様だ。

そしてその理由は——

「しかし、メリエラ様を題材にするとは……」

フレデリックが渡した艶小説の題材は、白銀の髪を持つ貴族の姫君で、文章を読めば読むほどそれがメリエラを指したものと分かるようになっていた。

もちろん、直截な表現がなされているわけではない。貴族の中で白銀の髪を持つ姫君はそれなりに存在するし、いくらでも言い訳はできる。

それに、貴族はこうした談話の題材にされることに慣れているし、一部では義務のように受け止めている者たちさえいた。特異な例では、自分たちの生活をおもしろおかしく描いた戯画を売り出し、一財産を築いた家まであったのだ。

「そりゃ、皇族になったらさすがに出版社が止めるだろうし、ネタとしても今が旬、出さないわけないだろ。ていうか、我らが主君の恋人たちは皆ネタにされてるぞ」

フレデリックは何でもないことのように告げるが、それは彼自身の娘が含まれていることも示していた。ただ、自分たちが世間でどれだけ話の種にされようと、いちいち意に介する必要性を感じていないだけだ。

これが別の国であれば、肖像権をはじめとする諸権利によって保護されるのだが、皇国にはより広範な意味での権利が名誉権として記載されているだけで、直接個人の私事を保護する権利は存在しなかった。

「それに、カールがブチ切れてるのはそれ自体が原因じゃなくてな」

「は？」

ウォルンドは雑誌をちらちらと読みながら、首を傾げた。

ならば何故、あれほどまでに荒ぶる龍と化しているのだろうか。

フレデリックはにやりと笑みを浮かべ、従弟の疑問に答えた。

「ちよっと通信でその雑誌の話になったとき、メリエラお嬢が『そういう作法もあったか』って顔してたんだと」

より正確に言うならば、『そういった状況』にも耐えられるよう後宮の設備を改修しようというところらしい。

「昔っからこういう話は女の方が乗り気だなあ。後宮の地下だって、女皇陛下や歴代の妃たちが張り切って拡張と改装してたし」

「そういうのですか……」

ウォルンドにも、理想の貴族令嬢の姿がある。

ある程度歳を経ており、現実も理解しているのだが、やはり理想というのはいつまでも心の一部を占めているようだ。そんな理想に少しだけひびが入ったように感じ、彼は少し引き攣った笑みを浮かべた。

「俺たちからすればお妃連中がそういうのに夢中になってる方が幸せなのは間違いない。だから、面倒事は全部陛下にぶん投げるんだよ」

このフレデリックの考えは、皇国の国民のものに近かった。

皇国の民の大多数にとつて、夫婦間のあらゆる交渉が円滑に進むように努力するのは美德のひとつであり、それを掣肘するような要素はほとんど存在しない。

海の向こうの宗教国家では、『結婚もその後の交渉も神聖なもの』という価値観を浸透させることで、一種の社会制御装置としているのだが、どちらが正しいのか結論が出ることはないだろう。

「幼年院のお遊戯みたいに『みんな仲良く』ってやつだ」

「仲良くなれるんですかね」

「そのときだけ仲良くなればいいのさ。女心は簡単に裏返ったり戻ったりするから、常に同じ状態にしておこうなんて考えるのは無駄の極みだぜ？」

そう呟くフレデリックの目は、遙か遠くを見ていた。

彼自身、ふたりの妻の間で奔走する日々である。重要性はよく分かつていた。

「その雑誌な、うちのが買ってきたんだ。街に出て何してるのかと思ったら、義理の娘になる連中を題材にした艶本やら何やら買い漁ってるんだぜ？ 俺もう色々諦めたよ」

はは、と乾いた笑い声を発し、フレデリックは沈黙した。

彼の邸宅では、議会期間中、妻のうち最低でもどちらかひとり滞在し、様々な訪問者をもてなしている。そして夜は娘たちの今後について妻たちと延々議論を重ねているのだ。

「ぜってー俺らの話もしてるぜ」

貴族の娘が母親やそれに類する人物から夜の手ほどきを受けるとするのは、もはや伝統と言っても良いかもしれない。

おの家の家に独自に作り上げた手順書が存在し、嫁入り前の娘に教え込むのである。なお、母がいないメリエラはカールの依頼を受けたウィリアムの母ルイーザから、フェリスは祖母であるマリアから色々教わっているはずである。

教えてもらっていないのは、夫となるレクティファールだけだった。

「お前も娘が生まれたら頑張れよ。助けてやらねえけど心の中で応援だけしておいてやる」

「そんな……」

こうした貴族の男たちの悲哀もまた、受け継がれる伝統だった。

「ふふふ、楽しそうねえ」

マリアは、カールがカント男爵に止めを刺し、連名で議案を提出してきた他の貴族たちに舌鋒を向けた段階で、席を移動していた。貴族議会には定められた席など本来は存在せず、慣例的に同じ席に座っているに過ぎない。

新人議員は大抵、同じ派閥の議員から選ばれた教育係の隣に座り、以降ずっとその席に座り続けるようになるだけだ。

「どう？ あなたも交じってみたら？」

「いい」

一翼分移動したマリアは、ニーズヘッグ翼の最上段近くにいたアナスターシャの隣に座りながら訊いた。返答は予想通りのもので、当然マリアに気分を害した様子はない。

「相変わらずあなたのお仲間は静かねえ」

そう言ってマリアは、ニーズヘッグ翼に座る議員たちを眺めた。

彼らは非常に落ち着いた様子で帳面に記録を取ったり、資料を捲ったりしている。そして、ほとんどがカールの怒声に怯えていないようだ。少なくとも外見はそうだ。

「昔からあなたのところは学者系の議員が多いし、うちと少し交換して欲しいくらいよ」

「それは、構わない……でも、多分誰も行かない」

「でしようね」

マリアはアナスターシャの言葉に心の底から同意する。

ニーズヘッグ公爵系議員は、学者系の貴族が大半を占めており、政情分析などの正確さでは他のどこにも負けていない。ただ、こうした政治的権威の是非を議論する場合は、政治学者と歴史学者の一部が時折話し合いに参加する程度で、ほとんどの議員は機械的に議案を検証する程度に留まる。

他方、マリアのレヴィアタン公爵系は、商人から身を興した貴族が多く、大抵の議案に口を挟んで

は騒動を大きくするという特徴があった。

また、議会に提出する議案の半分以上がレヴィアタン公爵系議員の手によるものであり、彼らほど貴族議会で目立つ存在はない。

「カント男爵はもう少し根回しを覚えるべきね。まだまだ若いからしょうがないけど、カールちゃんとの機嫌が悪いときに八つ当たりの種になる議案なんて出すから……」

とは言うものの、カント男爵は事前にマリアに今回提案する議案について伺いを立てていた。そして彼女は「好きにしないさい」と答え、カント男爵はそれを了解の意と受け取った。

マリアの言い回しに慣れている者ならば、彼女は提案を了解すると同時に、提案者に総ての責任を負わせたのだと分かっただろう。

これは『如何なる議員も、議案を提出する権利を持つ』という貴族議会の原則に従っただけで、マリアにカント男爵に対する悪意は全くなかった。

「レクティファールが、いる」

傍聴席を見上げ、アナスターシャが呟く。

マリアも、傍聴席に見慣れた白髪の男の姿を見付けた。

レクティファールは、次々と議員を締め上げていくカールの姿を見たり、他の議員たちの様子を順に眺めているようだ。

やがて、マリアとアナスターシャのいる場所に目を向けたが、彼はふたりと一瞬視線を交わすだけでそれ以上の行動を見せることはなかった。

「真面目に仕事をしているよね」

「彼は、仕事は真面目」

そんなレクティファールの態度が少し不満なマリアに対し、アナスターシャはごくごく一般的なレクティファール評を口にする。

しかし、マリアにとって一般評など顧みるに値しないものらしく、ふて腐れたように唇を尖らせる。「真面目なんて、人生をつまらなくさせるだけでしょ。何ごとも適当なくらいでちょうどいいのに……」

「だったら、本人に、そう言えばいい」

小さな黒龍の公爵は、マリアに一瞥さえくれずに言い切る。

手元の資料には細々とした覚書が記されていて、世間の風評と違い、彼女が至極真つな議員であることを示している。

「言ったところで本質的には何も変わらないわ。みんなそう、誰かに何かを言われて変わるような可愛げのある人に、皇王なんて務まらないもの」

彼らは、誰かの言葉を受け入れはする。しかしそれは自分を変化させるものではなく、ただ見せか

けだけ変わったように錯覚させているに過ぎない。

そうあるべくして創られたのだから、そうあるべきなのだろう。マリアはそうのように自分を納得させたが、何も感じないわけではない。

「可愛いのに可愛くない。さてどうしてあげましょうか」

そうして様々な想像を巡らせることが、最近のマリアの楽しみだ。

息子夫婦を救ってくれたレクティファールには、この上ない恩がある。自らの感情と思考する時間を捧げることに何ら問題はないはずだ。

「――」
アナスターシャはそんなマリアを見て、若い女学生が放課後の予定を立てているかのようだと思った。年齢不相応だとも思ったが、口にはしなかった。



世界を初めて憎んだのはいつのことだっただろうか。

母が泣いているのを見たときか？

己に流れる血の真実を聞かされたときか？

それとも、この世界に生まれ落ちた瞬間からか？

（くだらん感傷……そう言っていられるのがどれだけ幸せなことか）

この国に暮らす人々は、自分の存在など知らないだろう。

知らぬ存在に心を傾ける者はいないのだ。

「殿下、準備が整いましてございます」

傍らに傳いた男が恭しく彼を促す。

混乱する祖国を纏め、本来あるべき姿に戻す。それが自分の血に課せられた使命であり、この上ない復讐だった。

「ああ、分かった」

碧の目を開き、立ち上がる。

窓から差し込む光に赤橙の長い髪が輝き、艶やかな黒翼が鈍く光った。

「行くぞ」

ただひたすらに逃げまどつてきた。

様々な国へ逃れ、己の矮小さと世界の大きさを知った。

その結果、自分を追い遣った国の脆さと汚さを理解した。

「王都の連中に、自分たちがしたことの報いを受けさせてやる。だから待っている、ウイリイア」

彼——レイヴン・ゲート・ガリウエドは、獣じみた笑みを浮かべ、自分が過ごしてきた薄暗い部屋を後にした。



西域の歴史は古い。旧帝国崩壊前から他大陸への窓口だった西域は、人の往来が盛んで、同時にそれに見合った投資が行われていた。

未開の地とされてきた大陸東部と比較して、人口は遥かに多く、旧帝国時代でさえ帝都周辺よりも栄えていると言われたほどだ。

だが、栄えていたからこそ、旧帝国崩壊の余波を大きく被ることになった。

西域は商業によって成り立っていた。しかし巨大な不況が西域一帯を襲い、膨大な失業者がそこかしこに溢れかえる。

それは、旧帝国時代に虐げられていた、西域に暮らす多数の亜人種族に、叛乱の機会を与えることになった。彼らが得ていた富は、帝国という枠組みがあつてこそ得られるものであり、大陸中が戦乱に包まれたこの時期、西域は周辺地域からの侵略を受けて瘦せほそるだけだったのだ。

混乱の中、幾つもの国家が乱立し、滅び、統合され、再び滅んだ。

もはや西域は安全な商圏ではなくなり、大陸の窓口としての機能も失うことになる。そこへ台頭してきたのが、東方に建国された皇国と、いち早く纏まった自治都市同盟である。

皇国と同盟は、西域の諸国家と、そこを拠点にしている大商會が塗炭の苦しみを味わっているまさにそのとき、世界の海を庭とする巨大商圏を建設した。

皇国は自らの領土に眠っていた膨大な資源と優れた魔導技術を用いて、自治都市同盟は西域から逃れてきた小規模ながら逞しい交易商人たちによって、商圏を大きく広げること成功する。

旧帝国崩壊から約三〇〇年、奴隸種族の叛乱に端を発する人間種の北方への脱出などを経て、西域が一応の安定を見たとき、西域の人々の前にあったのは、自分たちの手から離れた海原だった。

アルマダ大陸の商人といえ、皇国が自治都市の商人を示す言葉となり、西域はもはや古い歴史を持つだけの一地方となっていたのである。

西域がかつての繁栄を取り戻すことはなかった。しかし人々は自らができる最大の努力を行い、西域を復興させた。

その間、北方に追い遣られた人間種たちの国家が幾度も攻めてきた。

西域の国々は時に勝ち、時に負け、やがて三つの大国が離散と集合によって誕生した。うち一国が、〈マルドゥク王国〉である。

〈マルドゥク王国〉は、旧帝国時代に虐げられていた有翼人たちが作り上げた国である。彼らは飛行

能力を持つが故に旧帝国時代でも軍に用いられており、被支配種族としては珍しいほどに多くの軍事技術を継承していた。

旧帝国時代の設備や技術を用いて再興した国はいくつもある。〈マルドゥク王国〉にとってのそれは、旧帝国が残した軍事教育と軍事技術。それだけに彼らの軍は精強だった。

今でも帝国との最前線には多くの兵が配置され、西域への侵攻を食い止める防波堤となっている。

そうした地政学的原因から、〈マルドゥク王国〉の軍事政変についての各国の認識は、いささか樂觀的だった。

政治的混乱はあっても、彼らの国土が帝国陣営と接しており、帝国軍西方軍集団と睨み合っている状況にある以上、軍事的な騒乱が拡大することはないだろうと考えられていた。

王国の出自を思えば当然のことで、同時に国益という面から推測してもそう間違っていない予想だった。

しかし、それは容易く裏切られた。

「何故だ！ 何故アイツらが動いている！」

王国北東部、シルブ県の王国軍ヘライデ・シルブ基地で、基地司令の陸軍大佐アントニオ・ヴェスパティレは、報告を持ってきた部下に向かって叫んだ。

「それは、小官にはなんとも……」

上官の声を浴びた部下は縮み上がり、困惑したように答える。

アントニオはそんな部下の様子に気を掛ける余裕もなく、自らの背後に掲げられていた王国とその周辺の地図を睨んだ。

（何を考えている、ヴィッツ！）

彼の視線は、〈ライデ・シルブ〉基地の北二〇〇キロにある〈ボルデ・シルブ〉基地に向けられている。部下の報告では、そこにいたヴィッツ率いる陸軍第九四空中騎士連隊が、基地を放棄して王都へ向かっているというのだ。

〈ライデ・シルブ〉がアントニオ率いる空中騎士連隊を主力としているのと同じように、〈ボルデ・シルブ〉もまた、空中騎士連隊を主力としている。

むしろ、空中騎士連隊を運用するために基地が作られ、帝国に備えていたという表現が正しい。こうしなければ、空中騎士連隊を運用できないのである。

そもそも空中騎士連隊とは、有翼人種の国である〈マルドゥク王国〉で花形とされている部隊であり、軍の中核をなす部隊である。

専用に開発された軽量魔動式甲冑を纏い、複数の術式を組み込んだ突撃槍を抱えて、敵の頭上から

急降下攻撃を行う空中騎士。彼らは、上空警戒の天馬部隊や一角馬部隊の援護があれば、堅牢な装甲で守られた自動人形さえ一方的に撃破できる——と軍の高官は嘯いている。だが、実際に空中騎士を率いている者たちや空中騎士自身は、自分たちが大空の中でもっとも脆弱な生き物であると自覚していた。

大地の上で、人間種や力なき混血種が、竜種や獣人、幻想種といった種族に劣っているように、有翼人は空に生きるものの中で最も劣弱だった。

爪も牙もなく、魔力を扱う技術に突出しているわけでもない。飛行速度では小鳥に勝る程度、昇れる高度は世界で最も高き山の頂に届かず、夜目が利くのは一部の部族のみ。

結局のところ、地上に向けての降下突撃以外で、有翼人が他の種族に優越する手段がなかったというのが偽らざる現実である。

様々な技術革新によって、有翼人の扱える魔動式甲冑が実用化され、魔導武具が生み出され、非力な彼らでも一定以上の攻撃能力が得られるまで、彼らの任務といえば空からの偵察が主であった。

今でも有翼人の偵察部隊の練度が高いのは、その頃に得た技術や経験が活かされているからに他ならない。

〈マルドゥク王国〉の栄えある空中騎士連隊——人々の抱く幻想を守り抜くため、彼らは指揮官から一兵卒に至るまで生え抜きの精鋭で構成されている。

貴重な精鋭であるが故に、戦線に占める彼らの重要性は高い。最前線の後方に予備機動戦力として存在するだけで、帝国の動きを制限することができるのだ。アントニオがいる〈ライデ・シルブ〉は、そのために作られた基地であった。

〈ボルデ・シルブ〉も同様の役割を担っているのだが、アントニオの同窓であるヴィッツ・ハルケン大佐は、連隊を連れてそこを離れ、王都に向かっているというのである。

アントニオとヴィッツは士官学校時代からの仲で、家族ぐるみの付き合いがあり、息子同士も友人だ。それだけに、アントニオは親友の行動が信じられなかった。

「帝国がこれを機に動かないとも限らん。前線に警戒を促せ」

アントニオは辛うじてそれだけを部下に命じた。

前線も自分と同じ情報を得ているのなら、すでに警戒態勢が敷かれているはずだ。

東方での敗北が影響しているのか、現在のところ帝国の動きは鈍い。しかし、これからもそうであるとは考えられない。

部下も同じことを考えていたのだろう、すぐに彼の知りたかったことを報告した。

「擬装撤退ぎさうてつたいと思われるのか、現在のところ、帝国軍に動きは見られません。前線では帝国軍の動きについて意見が分かれているようですが、現状を維持するということでは一致しています」

ただ、と部下は言った。

「前線の部隊の中にも、王都に向かう部隊が現れているようです。この動きについては、全く情報がありません。司令部が慌あわててその意図を問い質したところ、本営からの命令であると答えたとか」

「本営だとか？」

アントニオは、現在の王都が一部の軍人貴族によって制圧されていることを知っている。

彼自身は、そんな軍事政権側に賛同するつもりも排撃するつもりもなかった。本来、自分たち軍人が政治に口を挟むことは厳げんに慎つつしむべきであり、たとえ同僚が禁を破ったからといって、自分たちも同じ行動を取る免罪符めんざいふにはならない。

自分たちの任務は、正規の命令系統で受けたものであり、撤回てっかいされていない以上はそれに従うべきだと思った。

そういった態度を日ひ和見やみだと言う者がいることは知っている。

軍人ならば王都の逆賊ぎやくぞくを討つべきだと。

しかし、軍人が誰それを逆賊などと断じてしまえば、秩序の崩壊を加速させるだけだ。大きな力を持つているからこそ、己を律する必要がある。

（ヴィッツも、同じように本営からの命令を受け取ったとも言うのか？ 軍事政権側のやり方をあれほど嫌っていたアイツが？）

アントニオは、親友が王都にいる連中を心底嫌っていたことを知っている。

最前線の守りという重要な役目を負っていることもあり、直接的な行動に出ることはなかったが、間違いない軍事政権側の命令に従うような性格ではない。

（討伐軍というわけでもあるまいし、アイツが素直に命令に従う相手が中央にいるのか？）

アントニオは大きく息を吐き出し、両目を覆い隠すようにしてこめかみを揉む。

ヴィッツが何を考えているのかは分からないが、自分がすべきことは何ら変わらないのだ。

公にはされていないが、前線部隊にも軍事政権側と心を同じくする者たちがいることは確認されている。

軍事政権側も——むしろ彼らの方が、国外にいる正統政府よりもほど前線の現状を知っているため、戦線崩壊の危険がある部隊から兵力を引き抜くことなどあり得ないのは、容易に想像できた。

それらの理由から、前線部隊では軍事政権側と接触している部隊を内偵するのみに留めていた。

また、正統政府からも軍事政権からも、前線部隊には「国境警備任務を継続せよ」という命令しか届いていない。どちらの命令に従っても、他方の命令に反することはしないのだ。

前線のことだけではない。正統政府は軍事政権そのものの扱いに関して慎重になっている。

かつて正統政府の大半を占めていた「逆賊討つべし」という考えはいつの間にかやら姿を消し、首班であるパトゥーリア王子の周辺には、軍事政権を帰順させる方が得策であると唱える者が増えた。

何が起きたのか、答えはひとつだ。

軍事政権へ密かに手を差し伸べている〈アルトデステニア皇国〉からの働きかけが、形になりはじめたのである。

彼らは、王国の状況を改めて正統政府に忠告し、迂闊に軍事政権の力を弱めることは帝国に利すると囁いた。

正統政府の重鎮たちも、自分たちの権力基盤が王国内部にあることは理解している。万が一にも帝国が王国に侵攻し、権力基盤を破壊した場合、自分たちが大きな損害を被ってしまうこともだ。

皇国は、そんな彼らの不安を大いに煽る。

軍事政権を打倒するのはいいだろう。しかしそのあと、王国の軍勢を誰が纏めるといふのだ？——少しでも先が見える者ならば、軍事政権が王国自体を人質に取っているという現状を理解できるはずだ。

そして正直なところ、正統政府に協力している〈アルストロメリア民主連邦〉も、軍事政権の打倒を望んでいるわけではない。軍事政権が軍内部で一定の支持を受けていることは把握しているし、積極的に支持を表明していなくても、心情的には軍事政権に近いという軍高官も少なくない。

市民の間でも、軍事政権を認める者は増えた。

なぜなら、皇国が背後にいるとしても、軍事政権の統治は以前の王統政府時代と同じか、それ以上の水準にあるのだ。

市民が軍事政権を認めるようになってでも不思議はない。

皇国資本が軍事政権の許可を得て〈マルドゥク王国〉の市場へと参入するようになったことで、他国や国内の商会も、軍事政権下での商取引に不安を感じなくなったらしい。〈マルドゥク王国〉国内での経済循環はほぼ以前の水準に戻り、市民が軍事政権に不満を抱く理由のひとつは、完全に排除されたと言つて間違いない。

武力による政権奪取は、確かに他国の警戒心を煽ったが、彼らは武力のみで政権を奪ったわけではない。彼らの背後には旧体制に不満を持つ官僚や貴族、商会などの存在があった。そうでなければあれほど簡単に首都を掌握できなかったし、今に至るまで占領地域を維持することもできなかったらう。

現状を整理してみると、正統政府が軍事政権を打倒する名分は王家の名ひとつであり、確かにそれは名分にはなるのだが、利益にはならないのである。

アントニオは、そんな状況を良く理解していた。

「『ボルデ・シルブ』の兵で前線から移動したのは？」

「予備部隊が幾つか。ただ、最後方の予備部隊でしたので、大きな影響はなかったようです」無論、全く問題がないということはないだろう。

王国の兵力には限界があり、最前線は常にぎりぎりの兵力によって支えられていた。帝国側の兵力

が減っている状態でなければ、とても許容できる状況ではない。

「クソ、最近ろくなことがない」

アントニオは机の上に置いてあった保湿箱を開き、そこから葉巻を一本取り出した。軍事政権が王都を制圧してから、とみに消費が増えたものがこれだった。

酒は判断力が鈍るため飲むことができず、結局葉巻に逃げるしかない。

「あ、すぐに火を……」

「いらん」

部下が慌てて点火器を探す素振りを見せると、アントニオはそれを制して、引き出しにあった油式点火器で火を点けた。

紫煙を吐き、苛立たしげに机の天板を指で叩く。

背中の翼が不機嫌そうに揺れ、眉間には何本もの深い皺が刻まれた。

（連邦の犬に成り下がった正統政府は論外だが、周辺国との関わりを考えれば、軍事政権も当てにならない。皇国も軍事政権を表立って認めたわけじゃない）

対帝国の障壁としてのマルドゥクの重要性を理解している幾つかの国は、軍事政権下にある現状でもある程度変わらない付き合いをしている。

生活物資の流通が滞っていることはないし、商業もそれなりに円滑に回っている。正統政府が軍

事政権を批判して各国に経済制裁を求めたこともあったが、結局は連邦に近い一部の国が実行したのみで、今ではその国々ですら禁輸などの処置を中止している。

皇国やイズモ、都市同盟が禁輸措置を取らなかったため、かえって自分たちの首を絞めることになってしまったのだ。

正統政府にとって業腹なのは間違いない。口を開けば皇国を非難するのも無理からぬことだ。

（だが、この大陸で帝国に相對している以上、皇国との間に亀裂を生じさせることは避けなければならない）

それは連邦も同じらしく、皇国嫌いの最右翼である正統政府首班のパトゥーリア王子を表に出すことが少なくなっている。王子は、自分の意見を曲げて他者の機嫌を窺うという腹芸が全くできないのだ。（分かっているんだ。今のままでは、そう遠くない未来にこの国は立ちいなくなる）

同じような危機感を抱いている人々が多い。

彼らは貴族、平民といった身分、政治家や軍人、商人といった職業に区別されることなく、自国の現状を憂えている。

武力による政変を起こした者たちも、元々はそうした人々だった。

（そもその始まりは、やはり皇国だったな）

皇国の皇王崩御に端を発した騒動は、西域にも波及した。

皇国の混乱によって、大陸の流通網に僅かながら影響が出たのだ。ただそれ自体は、悪影響を最小限に留めようという努力が皇国内部で行われたおかげで、さほど大きな問題を引き起こすことはなかった。

しかし当時の王国政府は、商業活動の鈍化による税収の減少を殊更大きく喧伝し、臨時の増税を実行してしまう。見る者が見れば、それが単なる口実であり、臨時増税の大義名分に利用しただけなのは明らかだった。

確かに、当時王国は皇女グロリエ率いる帝国軍の大攻勢によって疲弊していた。軍を支えるために税を引き上げる必要があったのも確かだ。

だが、多くの若者を帝国との戦いで喪い、同時に経済的打撃も受けた王国の民に、政府の行動を許容する余裕はなかった。

ここに至るまでも、王国政府は幾つもの失政を積み重ねており、今回の件はそれがついに爆発してしまつたという面があるのかもしれない。

帝国との戦いが一応の安定期にあつたここ二十年ほど、王族は享樂に耽り、貴族は国家体制を蝕食していた。

国の体力が衰えていたのだ。

そこに、政府が止めを刺した。

（軍の中から呼応者が出たのも仕方がない）

軍費を賄うために、軍人年金の削減なども議論されていた時期だ。自分たちは命を捨てて国を守っているというのに、国の方が自分たちを裏切ろうとしている。そう考えても無理はない。

アントニオ自身、酒の席で愚痴を零したこともあった。

（あいつも同じだった）

友人であるヴィッツも、政府の方針に憤っていた。特にアントニオは父も軍人だ。彼は戦いの中で片翼を失い、今は国からの年金で暮らしている。

軍人として国に身を捧げることに疑問はない。しかし、その国が間違っていたら、自分たちの行動は果たして正しいのか。

（俺たちは、国民を虐げるために戦っているんじゃない）

国民も、軍の実情はよく知っている。だから、軍人たちは尊敬を集めているし、新たに軍に志願する若者が減っているという話も聞かない。

ともに苦しい時期を乗り越えようという意志が国民の中に存在したのは間違いない。それを、政府が踏みにじってしまったのである。

「——おい」

アントニオは苦虫を何匹も噛み潰したような表情を浮かべ、部下を呼んだ。

「は……」

部下は若干怯える素振りを見せたが、すぐに背筋を伸ばして答える。

「王都の方では大した動きはないんだな？」

「現時点で情報は入っておりません。補給物資なども概ね予定通りに到着しております」

「そうか……」

どんな戦場であろうとも、中央から策源地までの補給が滞った時点で破綻する点は変わらない。

アントニオは大きく煙を吸い込み、気に入っていたはずの煙草の味に苛立った。

（連邦も皇国も、部外者の身で人の故郷をいのように弄びやがって……！）

一軍人として客観的に見れば、そのどちらの国もそれなりに信用できる。

しかし一個人としてなら、自分の大切な故郷を好き勝手に切り分けようとしているとは思えない。だが、俺たちにはどちらも必要だと来た！）

帝国の圧力を分散するためには、大陸の有力国家が帝国と敵対している状況が望ましい。へマルドゥク王国〉単独で帝国と相对することなど不可能に近いのだ。

現在帝国は、皇国との戦いで蒙った被害に加え、国内で帝王位を巡る争いが激化していることもあり、軍の動きが鈍化している。

前線からの部隊移動は、それを見越しているからだろうが、だからといって今こんな危険を冒す理

由が分からない。

アントニオが見たところ、正統政府はそう遠くない未来に、連邦と皇国の二大国間の取引によって軍事政權と和解することになる。

連邦の目的は海を得ることであり、皇国は西域が安定した皇国經濟の受け皿であり続けなければならない。考えているはずだ。目的さえ達せられるなら、両国はどちらが政權を担おうと構わない。

至極真つ当で、誠実な結論だ。

両国の政府が責任を負うべきは、自らの国の民と政体と法に対してのみであり、他国というのは自国の利益を構成するひとつの外的要因に過ぎない。

皇国は他の国に較べていささか人のよすぎる外交をするが、それも自国の利益の確保が大前提である。国益のために他国の利益を保護し、自国の商会のために他国の商人を保護し、自国の民のために他国の民を守る。前提が崩れることはない。

「どういつもこいつも好き勝手に動き回りやがって」

吐き捨てるようなアントニオの言葉に、部下が憐憫とも取れる眼差しを向ける。

国の現状を憂えても、目の前に敵がいるならば、そこから目を離すわけにはいかない。

幾重にも作り上げられた防衛線を維持することが、現在の彼らの役目であるのは明白だ。ここを突破されることは国土防衛上、致命的な結果をもたらす。

「くそ」

アントニオは頭に鋭い痛みを感じた。

敵と味方が判別できない状況というのは、軍人にとつてもつとも馴染み深く、しかし精神的重圧を感じるのである。

前方にいる帝国軍は間違はなく敵だが、隣や背後にいる味方が本当に信頼に足るかどうかが分からない。国が割れている現状では、同じ命令系統に属しているとも確信できないのである。

「おい、念のために先任伍長に兵たちの様子を確認させろ。俺は部下を疑いたくない」

「はっ」

部下はそれを命令として受け取り、敬礼して踵を返す。

退室する部下を見送り、アントニオは机の上に伏せてあった写真立てを手に取った。

写っているのは、アントニオとヴィッツの家族である。

ともに行楽地に出掛けた際に撮ったものだ。

肩を組み、満面の笑みを浮かべている自分と友人。その顔を見詰め、アントニオは独語する。

「貴様が、国は裏切っても家族は裏切らないことは分かっている。一年後、十年後、貴様の行動が正しかったと評価されても俺は驚かない」

戦場での野性的な勘は、ヴィッツの方が遥かに優れていた。

状況を一変させるだけの閃きを見せたことも、一度や二度ではない。おそろく今回の行動も、ヴィッツなりに成算があつてのことだろう。少なくとも、家族に迷惑がかかるような真似はしないはずだ。

「――」

アントニオは再び写真立てを伏せ、天井を仰ぎ見た。

安普請の司令部らしく、構造材が剥き出しになっている。

「そういえば、この建物も皇国の商会が売り込んできたものだったな」

有事の際に、現地に仮設司令部を建てることは珍しくない。移動しやすいようにと簡易天幕で済ませることもあれば、ある程度の期間使用することを考えて、それなりの耐久性を持たせた建物を造ることもある。

（適当な布の天幕や、そこらの納屋を借りるなんて考えはもう古いんだろうな）

アントニオは眉間を揉みながら、自分が士官候補生だった頃の光景を思い出す。

当時の軍は、宿営地の設営の際にみすばらしい天幕を使うか、宿営地近くにある農家の納屋や軒先を借りるのが当たり前だった。

行軍訓練の中でもそうしたことは当たり前のように行われ、揉め事が起きたときもある。納屋に置いてあつた農機具を盗んだり、近くに住む農家の娘を攫つてきて乱暴するなどという行為もあつた。

当然、それらの行為は許されるものではない。しかし、政府の怠慢が軍の現場にまで波及していた時期が確かに存在したのだ。

（誰も彼もが責任から逃げ惑った時代か）

それでも、アントニオが士官候補生であつた頃は比較的『まし』になっていた。

王家からも国民からも絶対的な信頼を寄せられていたひとりの将軍が軍を率いており、その人物によつて綱紀肅正が行われたのだ。

それ以前の時代なら、軍は山賊よりも多少上等、といった程度の武装集団でしかなかった。一部の精鋭を除けば、無頼者に軍服を着せただけという有様で、彼らを如何にして軍という体裁に纏めるか、誰もが四苦八苦していたのである。

そうした意味では、アントニオたちの世代の将校は幸せだ。

部下は軍の改革が行われたあとに入営した者が大半で、以前からいる老練な下士官たちも選りすぐりのまともな連中だったからだ。

しかし、軍の改革が行われても、政府の改革は全くと言って良いほど進まなかった。

貴族が幅を利かせており、彼らの過半が己の権利を守ることに汲々としていた。心ある貴族たちは、そんな状況をどうにか変えようとしていたようだが、彼らが頼るべき王家自身が、鍍金の社稷を象徴する存在に成り下がっていた。

（ツケで放蕩の限りを尽くし、その結果がこれか）

翼ある者の誉れであるはずの空中騎士団も、今は張り子の虎だ。

部隊の練度は低くない。だが、それを運用するための諸々の条件が厳しいのだ。軍の部隊とは、精鋭であればあるほど、行動に必要な予算や物資が多くなる。

膨大な時間を使って訓練を施し、莫大な予算を投じて装備を整える。

軍において何が『無駄』な予算であるかを見極めるのは難しい。必要がないように見えても、練度を維持するためには不可欠なことも多々あった。

予算を縮小して訓練時間を一週間削ったとしたら、同じだけの練度に戻すために一ヶ月必要になり、削減前と同じだけの成果を出すには、二倍の兵力が必要になるということもあり得る。

軍ほど現状維持に多くの金が必要になる組織はないかもしれない。

しかし、それを理解している者は恐ろしく少ない。

「どちらでも構わないが、ここが最前線の国であることを忘れてくれるなよ」

疲れ切った様子で深く息を吐くアントニオ。

だが、彼の苦労はこれだけでは終わらなかった。

「連隊長！」

突然、部屋の扉がけたたましく殴打される。衝撃で天井から落ちてきた埃がアントニオの顔に掛か

った。彼はそれを苛立たしげに払い、返答する。

「何だ！」

怒声そのものといった声だが、扉を開けた先ほどとは別の部下に、上官の機嫌を窺う余裕はなかった。

「ハルケン大佐がお見えです！」

「——!？」

このときアントニオを襲った驚きは、妻から妊娠を告げられたときよりも遥かに大きなものだった。手に持っていた煙草を膝に落とし、その熱で飛び上がるまで、彼は大きく目を見開いて硬直していた。

「よう、元氣そうだな」

扉を潜って姿を見せたヴィッツは、まるで近所の友人宅に遊びに来たかのような態度だった。

そんな彼の態度にアントニオと部下は困惑し、どのような態度を取るべきか判断できずにいた。命令違反者として逮捕拘束するべきだという考えと、そもそも本当に命令違反を犯しているのかという疑問が、ふたりの足を縫い止めていた。

「俺様の隊が動いた理由でも考えているのか？」

友人の心中を見透かしたかのようなヴィッツの言葉。

アントニオは部下に目を向け、顎をしゃくって扉の外を示した。

席を外せという意味だ。

部下はほんの一瞬躊躇したが、やがて上官の命令通りに部屋を出た。

「良い部下じゃないか。拘束される可能性も考えたんだがな」

そう言いながら応接用の革椅子に座ると、尻の物入れから銀筒を取り出し、蓋を開けた。そこから漂ってくる匂いから、中身が琥珀酒であることが分かる。

「何をしに来た」

アントニオは執務机に座ったまま、琥珀酒を飲むヴィッツを睨む。

軍の紋章が入った銀筒は、アントニオたちが士官学校卒業記念として同窓生全員と金を出しあつて揃えたものだ。

それまでの卒業生は、揃いの機械筆や鉛、葉巻入れなどを作っていたが、彼らの代は同窓生随一の酒好きであつたヴィッツの強い希望があり、この銀筒になった。

教官たちは苦笑していたが、意外にも同窓生たちの評判は悪くなかった。

もともと、そのときの同窓生で生き残っている者は全体の半分にも満たず、軍に残っている者となるとさらに少ない。

「寂しくて泣いてるんじゃないかと思つてな」

「冗談は顔だけにしろ、と言いたいが、確かにお前のせいで仕事が増えて泣きそうだな」

アントニオは、膝のところに空いた焦げ穴を指で撫で、少し形が崩れた葉巻をふかす。

「まあ、俺様はちゃんと命令を受けて動いているから心配するな」

「どこの命令だ？」

「そりゃ、我らが最高司令官さ」

アントニオはその言葉に眉を上げた。

王国軍の最高司令官は国王である。

王が不在となれば、正統なる後継者が最高司令官代行となるはずだった。

「正統政府か？」

現状、最高司令官を代行することが可能と考えられるのは、連邦にいる王子バトゥーリアだけだ。故に、アントニオは正統政府から直接命令を受けたのかと訝しんだ。

しかし、ヴィッツは喉を鳴らして笑うだけで、答えようとしなない。

アントニオは、彼の態度に不可解なものを感じた。とはいえ、付き合いは長いので、そういった人食ったような態度にいちいち腹を立てたりはしないし、あえて指摘したりもしない。

今回もそれは変わらず、アントニオはヴィッツが銀筒の蓋を閉じるまでただ黙って待った。

しばらく後、ヴィッツは先ほどまでのアントニオと同じように、天井を見上げながら口を開いた。

「トーニョ、お前は今の王国をどう思っている？」

それは、ヴィッツがこれまでまったく好まなかったはずの政治話だった。気の合う仲間同士で酒が入れば、当然政治の話も出てくる。

軍に対して敵対的な政治家を扱き下ろし、逆に好意的な貴族を持ち上げることも良くある話だ。しかし、ヴィッツはこうした話を好まなかった。

アントニオは、それがヴィッツの出自に関するものだと思っていた。

ヴィッツの父は、法衣貴族として政府で辣腕を振るっていたが、しかしある冬の日に冷たくなって発見された。それ以来、ヴィッツは政治に関わることを嫌がっている。

特に家族ができてからは、その傾向がより顕著になった。

「どうもこうもない。騒がしい、さつさと騒ぎを終わらせてくれ、とかその程度だ」
アントニオの紛うことなき本心だった。

自分たち軍人が職務を果たすためには、一定程度の政治的安定が必要になる。

それが無い状態では、軍がどれだけ力を尽くしても結果が伴わない。そしてそんな政治的“不安定”が長い間続いた結果、王都が軍高官の実力行使によって占拠されてしまったのである。

アントニオはこの点に関して言えば、同情と同時に憤りを抱いていた。

首都の混乱によって国の信用が損なわれれば、もつとも損害を被るのは国民たちだ。本来、軍は国民を様々な損害要因から守るために存在するのであり、国民に何らかの被害を与えた時点で、自分た

ちの存在意義を否定していることになる。

ヴィッツは、アントニオの言葉に頷いた。

「ま、その点は俺様も同意見だ。ただ、裏を知った今じゃ、王都の連中も可哀想な連中としか思えないね」

「裏、だど？」

友人が発した一語に、アントニオは思わず腰を浮かせる。

武力政変がどのような形で行われたか、詳細を知る者は少ない。

確実に言えるのは、軍事政権側は多少の混乱はあっても国の体裁を守り通し、今もそれなりの手腕で国家運営を行っているということだけだ。

それは、アントニオの常識からすれば意外だった。軍人というのは、政治的感覚が欠如しているか、持っていないかかなり低いことが多い。

軍の常識は市井のものとは大きく異なっており、優秀な軍人が優秀な政治家ではないことは確かだ。ごく稀に軍政治家として優れた技量を持ち、それが政治家としての技量に直結している人物も存在する。しかし、それはあくまで例外だ。

基本的に、軍人は政治家に向かない。

もしも政治家に向いている軍人がいるとするなら、その人物は軍人に向いていない軍人だろうと言

われていた。

「お前は何を知っている？」

「何を、と聞かれても困るぜ。俺様だって全部を知っているわけじゃない。それに、自分が知っていることが総てだと思っほど危険なことはないだろう？」

「――」

アントニオは黙り込むしかなかった。

己が握っている情報が総てであると信じれば、その埒外にある情報に足を掬われる。軍人――少なくとも指揮官は、自分が知らない何らかの情報が隠されていることを前提にして行動する。

知らないことが少なければ少ないほど正確な指揮が行えるのは間違いないが、情報を多く持っていないくても『間違っていない』指揮は可能なのだ。

「――じゃあ、お前はどこまで知っている？」

「今回の政変の首謀者。そして首謀者の目的ってところかな」

今度こそ、アントニオは立ち上がった。

机の天板に両手を叩き付け、引き出しに入れてあつた魔導銃を取り出そうとする。

軍の士官に支給されている魔導銃ではなく、個人的に手に入れたニーズヘッグ魔導工房製の大口徑魔導銃だ。

「おいおい……いきなりだな」

引き出しから銃を取り出したアントニオは、遊底を引いて魔素筒を薬室に送り込む。

そして、にやにやと軽薄な笑みを浮かべるヴィッツにそれを向け、安全装置を解除した。

「お前を拘束する」

そう告げ、照準をヴィッツの額に合わせる。

だが、へらへらとした笑みを浮かべていたヴィッツは、アントニオの人差し指が引き金に掛かったことを見て取ると、笑みをかき消して低い声を発した。

「やめておけ。確実に後悔するぞ」

「ここでお前を解放すればもつと後悔する」

アントニオの金属染みた冷たく、硬い声。

「俺様はもう後悔した。お前には後悔して欲しくない」

それに対するヴィッツの声は、空虚。

これまでの口調が総て嘘だったかのように、寒々しい。

「なんのことだ」

「現実だよ。この大陸のな」

ヴィッツは椅子から立つと、アントニオの前に立ち塞がる。

魔導銃の銃口は、ヴィッツの額にぴたりと合わせられていた。

「トーニョ、俺様たちは前だけを見過ぎた。俺様たちの仕事は敵を倒すことじゃない、敵から国を守るからだ」

「そんなことは分かっている」

アントニオは、ヴィッツが最近軍で流行している『汎世界脅威論』に毒されているのではないかと
思った。

皇国を端緒とする世界規模での動乱の到来を予言している代物だ。

各国軍の若手に支持者が多く、軍備拡大の口実として用いられることも多い。

噂によれば、当の皇国の摂政レクティファールが提唱したものだと言われている。

「あんな若造の言葉を信じているのか？」

「若造……ああ、例の脅威論か」

ヴィッツは友人の言葉を聞き、鼻で笑った。

「アレもまあ、そう悪いもんじゃない。大陸よりも広い視点で脅威を論ずる時期に来てるって意味ではな」

それは、アントニオも同意するところだった。

大陸の戦いだけを見ていられる時期は終わろうとしている。

技術が進むにつれ、あるいは国の持つ力が大きくなるにつれ、争いの規模はどんどん大きくなり、
争いの形態は多様化する。

『戦争はまるで病原菌のようだ』——誰の言葉だったかな

「エフェイロスだ」

古代中原国家の軍略家エフェイロス。

彼は、戦いをひとつの病原体として考え、戦いの姿形は常に進化していると唱えた。

人は戦争を経験すると、その悲惨さを抑え込もうと何らかの手段を生み出す。それは、国家間の条
約であったり、対抗兵器であったり、戦傷治療法であったりする。だが、戦いというものはそういつ
た状態にあっても、いつか表に出るべく道を探っている。そして突破口を発見し、実際の戦いとして
人々の前に現れると、人が築いた抑制手段——抗体は丸つきり無効になる。

条約に縛られない非正規部隊。

対抗手段のない強力な兵器。

これまでの野戦医療が通用しない傷病。

そして、それらをなんの恐怖もなく用いる人の心。

「大国連中を見てみる。連中はこの惑星をぶち壊しかねない兵器を持っていながら、まるで対抗手段
が生み出されることを恐れるように、兵器の存在を隠そうとしている」

「それは戦略上の優位を失わないためだろう。国を維持するためには必要なことだ」

兵器とは、運用するための様々な条件まで含んで、ようやく戦術単位となる。

その戦術を用いるために整備されるのが戦略であり、大国が持つ超兵器はそれぞれの国の戦略と完全に一体化していた。

そして各国は、自分たちが苦勞して整備した戦略が無効化されることがないよう、必死に努力を重ねているのだ。

「なら、それらの力を持たない俺様たちの国はどうだ？ 結局大国どもの顔色を窺う召使いのような存在に成り下がるんじゃないのか？」

「力があつたとして、この国がきちんと扱えるようになるまで、どれだけ掛かると思っているんだ。大国は生まれたときから大国『だった』んじゃない。アイツらは力を持ち、力を扱う手段を手に入れたようやく大国に『なった』だけだ」

結局のところ、軍勢力とは相手の意図を何らかの形で阻害する手段だ。自分の意図を押し通す手段ではない。相手の意図を阻害した結果、己の意志が通るに過ぎない。

「トーニヨ、この仮設幕舎はどここの国で作られた？」

「それは……」

「俺様は別に、他国製の兵器を使うことに反対しているわけじゃない。軍が一番力を発揮できるなら、

どこの国の装備品だって構いやしない。だが、俺様たちはもう、大同士の戦争に巻き込まれてるんだ」
ヴィッツは魔導銃を掴み、アントニオをじつと睨みすえる。

「連中は、俺様たちが気付かないうちに、まず商売で戦争を始めた。銭束で戦っている間はいいだろう。だが、いずれ銭束じゃなくて剣と砲弾で戦いはじめる」

それは、これまでの戦争と何ら変わるところのない真理だ。

最初は意識が衝突し、次に利益で、次に言葉で、次に拳で、そして最後は互いを滅ぼし合うような強大な力で衝突する。

「目の前の帝国だけを見ていればいい時代は終わった。俺様たちは自分たちの目で、自分たちの耳で、自分たちの敵を見定めなきゃならない」

「だからといって、国を揺るがすことが正しいとは言えない！ この騒動でどれだけの国民が財産を失い、命を失ったと思っている！」

「じゃあお前は、この騒動でどれだけの国民が失うはずだった財産を守り、失うはずだった命を承らえたと思っているんだ」

両者の言葉はともに正しい。

失った者がいれば、守り切った者もいる。

それは、視点を变えるだけで容易に入れ替わる。

この世界に正しい結果など存在しない。

多くの人々が正しかったと思う結果が、人々によって記録されるだけだ。

「俺たちが何を守っているのか忘れるつもりか！」

「俺様たちが何を守るべきか、考えるのをやめるつもりか！」

アントニオが吼えれば、ヴィッツがそれを詰る。

軍人としての役割を説けば、そもそも軍人の役割とは何を果たすために定められたのかと問う。

「貴様は何をしたいんだ？」

「なら、お前は何のためにそこにいるんだ？」

今自分たちが何のために相対しているのか、ヴィッツは友に問いかける。

「お前が持っている銃は、お前がこの国を守るために存在するんだろう？ 俺様たちは軍人だからこ

の国を守るんじゃない。守りたい何かがあったから、軍人になって、苦しい訓練に耐えて、辛い戦場

に立ち続けたんじゃないのか？」

ともに戦場を駆け抜けてきた。

多くの戦友が命を落とし、多くの敵の命を奪ってきた。

目的は、自分たちが自分たちであるために必要なもの——名誉、金、家族、恋人、友人、そしてそ

れらの人々が暮らす国を守ること。

「建前なんて忘れちまえ。俺様たちは、俺様たちであるために戦ってきた。だから、俺様はあの方に付く」

「それは誰だ？」

握った銃を押し下げ、ヴィッツは言い放った。

「どこかの国で誰かに守られているような奴じゃない。今この国にいて、この国を守る人さ」

アントニオは、友の口から告げられた名に一瞬呆然とし、そして、この国が本当の戦火に包まれる予感を抱いた。

——彼の予感は、的中する。



〈アルストロメリア民主連邦〉首都アニユア。

その西側を流れるラナ川の傍らに、〈アニユア〉でもっとも格調高い宿所と言われる『ホテル・ウィレ』があった。

街の五階にある会議室では、この日、与党連邦党の役付議員たちが集まって会合を開いていた。しかし、会議自体は非公式のもので、党代表である大統領さえ会合の存在を知らなかった。